

His Dark Materials における総体化の陥穽 ——Bolvangar の場面における “child” と “adult” をめぐって——

半田涼太

はじめに

児童文学 (children's literature) は、その名称から “child” (「子ども」) を志向せざるを得ないことが明らかだ。児童文学は “child” について語ることで——この語りは明示的な場合もあれば暗示的な場合もある——, “child” という概念を再生産したり, あるいは新たに生産したりする。換言すれば, 「人間」から “child” を抽出し, その結果, 「人間」を “child” と “child” でない者——つまり “adult” (「大人」) ——の2項に分割するのである。児童文学が行うこの “child” と “adult” の分割について, 児童文学研究者の石井直人が次のように述べている。「ここで, 児童文学のことにかえれば, 児童文学は, 「子ども読者」を意識することをとおして「大人と子ども」の分割を再生産しているというべきである」(37)。石井は読者に対する意識の側面に着目しているが, それだけでなく, 作品内で描かれる “child” や批評で論じられる “child” によっても, “child” と “adult” の分割は再生産される。分割それ自体は再生産であるが, “child” と “adult” をどのように分割するのか, その方法や基準は新たなものである場合もある。

さらに, “child” という概念や “child” と “adult” の分割が生産されると, その後, “child” という名称のもと, そこに当てはまると考えられる人々の総体化が行われる。つまり, “child” という名称でさまざまな人々が括られ, その共通項 (と考えられるもの) のみが認められる状態にされるのである。児童文学は “child” を志向せざるを得ないため, 往々にして無自覚に “child” の総体化を行ってしまう。このような総体化には, 少なくともふたつの問題が付き纏う。ひとつは多様な個の捨象である。安易な総体化が行われると, そこに内在する多様な個が捨象されることとなる。もうひとつは不当な共通項の付与である。総体化された人々の中で一部の人が或る特質を持っていた場合, あるいは実際に持っていないように思われた場合, 総体化された人々全員がその特質を持っているとされてしまうことがある。一般に我々は, さまざまな物事を或る程度まで総体化しなければ, 何かについて語るができない。そこで, 総体化された物事に会った時, どのような総体化がなされているのか, つまり何がどのような基準で総体化され, それにどのような名称が与えられているのか, といったことに留意しなければならない。そうしなければ, 或る観点から総体化された物事は, 別の観点からは多様である可能性があるにもかかわらず, それを看過することになる。ところで, 論述が前後するが, このように総体化の後に概念や分割が生産されることもある。つまり, その総体に新たな特質が付与されたり新たな共通項が見出されたりすることで概念が更新され, また, その特質や共通項が他の物事との差異

化を図ることができるようなものであれば、分割も生産されるのである。

このように、児童文学は“child”という概念や“child”と“adult”の分割を生産し、“child”や“adult”を総体化する装置となっていると考えられるのだが、これまでの児童文学研究において、児童文学がそのような装置となっていることに関する議論が充分になされてきたとは言いがたい。従来の児童文学研究は、“child”の存在や“child”と“adult”の分割を前提としており、児童文学がそのような装置となっていることに着目してこなかった。それだけでなく、後に例証するように、批評も作品と同様の装置となってきた。そこで、本論文では、批評そのものがそのような装置となっていることを自覚しつつ、児童文学作品がいかに“child”と“adult”の分割を生産し、“child”と“adult”それぞれの総体化を行っているかという一例を示したい。その例として、本論文では、Philip Pullmanの*His Dark Materials*（以下“HDM”と略記する）を取り上げる。数ある児童文学作品の中からなぜHDMを採用するのか。その理由は次の点にある。後に詳述するように、HDMは“child”と“adult”の分割に自覚的であり、この分割を物語に巧みに利用している。そのため、他の諸作品よりも明瞭に、“child”及び“adult”それぞれが総体化されている様子や、また、総体化によって引き起こされる問題を見て取ることができるのである。

ここで、HDMが行う“child”と“adult”の分割を確認しておく。一般的に、或る人が“child”であるのか、あるいは“adult”であるのかという判断は、さまざまな要因を考慮してなされ、時に決定不可能な場合もある。ところが、HDMではその曖昧さが無い。この物語内には、或る人が“child”であるのか、あるいは“adult”であるのかを決定するための明確な基準がある。その基準のうちのひとつが、作中に登場するdæmonの変化の可能性だ。主人公のLyraが生まれ育った世界——HDMには複数の異なった世界が登場する——では、人間はひとりにつきひとつのdæmonを持つ。dæmonはその人自身の一部と言える存在であり、人間以外の何かしらの生き物の姿をしている。dæmonは、その人自身の一部と言える存在でありながら、その人の意志とは異なった独立した自らの意志を持つ。そしてこのdæmonは、或る人が“child”の時にはさまざまな生き物の姿に変化できるが、その人が“adult”になるとひとつの姿に定まり、変化できなくなる。（しかし、人が“child”から“adult”へ移行することと、dæmonが変化できなくなることを、どちらが原因でどちらが結果であるのかは議論の余地があることを指摘しておきたい。）HDMでは、このようにdæmonの変化の可能性によって、或る人が“child”であるのか、あるいは“adult”であるのかという事柄が、明確に決定されるもの、かつ人間の本質的なものとされている。そしてこの物語は、Lyraのdæmonが特定の生き物の姿に定まるまでを、つまり、彼女が“child”から“adult”になる過程を描いている。

上述のことから看取されるように、HDMにおいて、“child”と“adult”の分割及びそれぞれの総体化は作品全体を通して行われているのだが、本論文では、HDM全体を視野に収めつつ、それが殊に顕著に認められるBolvangarの場面を主要な分析の対象とする。ここでいう「Bolvangarの場面」とは、3部作*His Dark Materials*のうち、第1部の*The Golden Compass*にある、主人公のLyraがBolvangarの施設に到着する場面（236）から、彼女が気球に乗ってBolvangarを去る場面（298）までを指す。

Bolvangarには、或る種の人々——同場面で“adult(s)”と総体化されている人々——が別の種の人々——同場面で“child(ren)”と総体化されている人々——を集め、彼らに手術を施して

いる施設がある。この施設では、“child”が“adult”にならないよう、“children”から daemon を切り離す手術が行われている。¹ 手術と言ってもそれはまだ実験段階であり、誘拐等によって集めてきた“children”に、暴力的にそれを行っている。この手術は禁忌を犯すようなものであり、手術の際、患者が死亡することさえある。Bolvangar はそのような場所だ。そこに Lyra が連れてこられる。

先に述べたように、児童文学が“child”という概念や“child”と“adult”の分割を生産する装置となっていることについて論じた批評を見出すことは、現状では困難だ。HDM に関する批評も同様であり、逆に、“child”と“adult”の分割を生産するような論考を見出すことができる。例えば、論集 *His Dark Materials Illuminated* に所収されている Shelley King の論文、“Without Lyra we would understand neither the New nor the Old Testament”: Exegesis, Allegory, and Reading *The Golden Compass* はまさにこれに該当する。その内容を簡潔に確認しよう。HDM の作中で、Lyra が alethiometer という特殊な道具を使うことができる能力を持っていることが判明するのだが、King は、Lyra のこの能力の源泉を、Lyra が“child”であることに帰している。しかしながら、HDM の作品内では、Lyra のこの能力の源泉が“child”であることとは明示されていない。それだけでなく、Lyra 以外の“child”は alethiometer を適切に使うことができない。したがって、King の批評が“child”とそうでない者を切り分け、そして不可避免的に“child”を総体化していることが納得される。King は、“child”という名称のもと、不当な総体化を行っていると言える。このように、児童文学の批評も、“child”という概念を生産し、総体化を——時に不当な総体化を——行う装置となっているのである。

以下、HDM のテキストを検証する。その際、語り手や作中人物達が Bolvangar にいる人々を“child(ren)”や“adult(s)”と呼んでいる事例を確認していくが、そのような事例は枚挙にいとまがない。そこで、それら全てに言及せずとも全てに言及した場合と同一の帰結に行き着くため、冗長さを避けるために、本論文ではそれら全てに言及することはしない。

繰り返しになるが、本論文では、HDM が行っている“child”と“adult”それぞれの総体化及び、それによって生じる問題を明らかにする。また、それによって、HDM が“child”と“adult”の分割を意識しすぎているという事実も明らかとなるだろう。

1. 語り手による総体化

まず、語り手が行う“child”と“adult”の分割及びそれぞれの総体化について確認しよう。そのため、はじめに HDM の語り手について述べておきたい。この語り手はいわゆる全知の語り手である。そして全知の語り手ではあるが、作中人物である Lyra の知識に寄り添って読者に物事を提示することがある。そのことが最も明瞭に了解されるのが、作中人物の名前の提示の仕方だ。Bolvangar の場面以前に名前が出てきている人々を除き、Bolvangar にいる“children”の中で名前が明示される者が 4 人いる。それは、“Annie”、“Bella”、“Martha”の 3 人 (245) と“Bridget McGinn” (251) だ。語り手は、“Annie”、“Bella”、“Martha”の 3 人の名前が Lyra に明かされた後に、初めて彼女達の名前を使用する。語り手は、それまで彼女達の身体的特徴や

窺われる気質によって3人を区別している。ところで、このように名前が明示される Annie, Bella, Martha であるが, “children” が “adults” と同一の場にいる時, “Annie”, “Bella”, “Martha” という個人は “children” という総体に吸収され, その個別性が消失してしまう。これに関しては, 後の防災訓練の場面の分析で確認する。

さて, Lyra が Bolvangar に到着し, そこにある建物に入った後に次のような描写がなされる—— “Adults were looking down at her [Lyra]: the man who’d brought her in, another man wearing a white coat, a woman in a nurse’s uniform” (237). ここでは3人が “[a]dults” という呼称で総体化されている。このように, 語り手は Bolvangar にいる或る種の人々をしばしば “adult(s)” や “grownup(s)”, “man (men)”, “woman (women)” と呼び, それから別の種の人々を “child(ren)” や “boy(s)”, “girl(s)” と呼ぶ。“adult(s)” 及び “grownup(s)” はその意味合いは異なるが, 指示対象は同一だ。また, “man (men)” 及び “woman (women)” は “adult(s)” を性別の観点から二分した呼称である。同様に “boy(s)” 及び “girl(s)” は “child(ren)” を性別の観点から二分した呼称だ。したがって, 性別の提示という点を除けば, “man (men)” 及び “woman (women)” の指示対象は “adult(s)” に, そして “boy(s)” 及び “girl(s)” の指示対象は “child(ren)” に収斂する。事実, 次のような事例が認められる。Lyra が Bolvangar にやって来た後, 施設内の, 或る種の人々が既にいる部屋に連れて行かれるが, その際, Lyra は “children’s faces” (243) に迎えらる。“children’s faces” という表現は語り手が用いているもので, この表現から, そこにいるのが “children” であることが了解される。そして後に語り手はその部屋にいる同じ人々のことを “girl(s)” と呼ぶ。このことから, “child(ren)” と “girl(s)” は同一の指示対象を示す呼称であることが理解される。

再度, 作中人物の名前に着目しよう。先に言及した3人の “adults” のうちのひとは, 別の人の発言から名前が “(Sister) Clara” であると判明する。一方, 他のふたりは不明なままだ。このように, Bolvangar の “adults” の中で, Sister Clara のみは, しばらくの間個別性が明確になる。Sister Clara と同様に, もうひとり, 名前が判明する看護婦がいる。“(Sister) Betty” (256) がその人だ。しかし, 計4回語り手によって名前を呼ばれる Sister Clara² と異なり, Sister Betty が語り手によってその名前を呼ばれることはない。彼女は “the nurse” とその役職名で呼ばれるだけである。また, Sister Clara と異なり, 彼女の個別性が明確になるのはほんの束の間だ。彼女の個性はすぐに “adults” という総体に吸収され, 消失してしまうのである。“Dr. Cooper” (272) も同様で, Mrs. Coulter が彼の名前を口にすることによって彼の名前が示されるのだが, 語り手が彼の名前を呼ぶことはない。語り手はどうやら Dr. Cooper のことを “the man” や “the doctor” と呼んでいるようなのだが, これらの呼称が Dr. Cooper のことを指しているのかいまひとつ判然としない。Dr. Cooper は Mrs. Coulter を交えた, 計4人で行われる話し合いの場 (270-74) で登場するが, Mrs. Coulter の発言以外, それが誰の発言であるのか判然としないのである。語り手は Mrs. Coulter 以外の発言者のことを “one of the men” や “someone else”, “the second man”, “the man”, “the doctor”, “a man who hadn’t spoken yet”, “the other man”, “the main speaker” と言いつつ表す。このような呼称では, その発言が誰のものであるのか判然としない。さらに, 発言者が全く示されない発言もある。この話し合いにおいて, Mrs. Coulter の発言を除き, 或る発言が誰のものであるのかは重要ではないようだ。

これらのことから、Bolvangar の “adults” の中で個人個人が明確に差異化されず、彼らが渾然一体となっていることが了解される。

上述のように、語り手は或る種の “adult” を、時に “the nurse” や “the doctor” と役職名で呼ぶ。しかしまた、先にも述べたように、語り手は同じ人々を “adult” や “grownup”, “man”, “woman” とも呼ぶ。“adult” や “grownup” では、それが指し示す範囲が広すぎる。というのも、“the nurse” や “the doctor” といった呼称の方が、Bolvangar に “children” を捕えて彼らに手術を施すことに携わる人物であることをより明瞭に表すはずだ。それにもかかわらず、語り手は彼らのことを指し示すのにあえて “adult” や “grownup” といった呼称を用いており、「“nurse” であること」あるいは「“doctor” であること」よりも、むしろ「“adult” であること」を強く印象づけている。語り手がなぜこのようなことを行っているのか、その理由が明示されることはない。しかしその効果は明らかだ。このような総体化が行われることで、惨い手術を行っている責任をその個人が負うのではなく、総体化された “adults” 全員——Bolvangar の “adults” にとどまらず、HDM のテキストを越えた “adults” 全員——が負うことになり、その結果惨い “adult” 像が形成され、また、その手術を施す “adult” とその手術を受ける “child” の分割及び両者の対立が生産されたり強調されたりするのである。この惨い “adult” 像の形成という点において、看過してはならない発言がある。その発言は “adult” のものであるため、“adult” の発言に着目する第3節で確認する。

次に、“children” が食堂で話し合いを行う場面 (249-51) に着目しよう。ここで発言する人々に対して、語り手は、“another girl with bright blond hair”, “the blond girl”, “one boy who’d been listening”, “someone”, “the first girl” といった呼称を用いている。このように、その人個人の名前ではなく、“girl” 及び “boy” をもとにして、それらを形容する形で言い表している。つまり、「“child” であること」、及び性別が明確になるように提示されている。このように、「“child” であること」に加え、さらに性別も提示されているが、これは、この場に “children” しかいないためだと考えられる。というのも、“children” が “adults” と共にいる場ではその性別が消失し、「“child” であること」のみが認められるような提示の仕方がなされるのである。このことは、次で述べる防災訓練の場面で認められる。

では、これまでに何度か言及してきた防災訓練の場面を確認しよう。Bolvangar で防災訓練が行われるのだが、その際、普段はその居場所が分けられている Bolvangar の “children” と “adults” が同一の場に集う。そのため、両者の分割及び対立が明瞭に立ち現れてくる。防災訓練が始まり、Bolvangar の施設にいる人々が一箇所に集う様子を、語り手は次のように描写している——“In the wide arena in front of the main group of buildings, a hundred or so people, adults and children, were milling about” (256)。ここで注目したいのが、語り手がわざわざ “adults and children” と説明を加えている点だ。この語り手の言葉から、語り手が “adults” と “children” の分割を生産していることが明瞭に了解される。彼らは同一の場で犇めいている (were milling about) にもかかわらず、語り手は彼らを明確に分割しているのである。そのような中、Lyra が防災訓練を抜け出すために雪玉を投げて場を混沌とさせる。“all the children” (257) が Lyra の真似をして雪玉を投げ始めるのだ。そして、“the shouts of the adults trying to regain control” (257) というように、“adults” は “children” を統制しようと

する。Lyra と Roger と Billy の 3 人がこの場所をいったん抜け出し、場面もそちらに移るため、その間この “children” と “adults” がどのような状態であるのかは提示されない。やがて 3 人がこの場所に戻った時には、“they [adults] couldn't get children to stand in line properly” (263)。このことから、Lyra は “none of the adults was used to keeping control” (263) ということに気付く。しかし最終的には、“the adults ushered the children inside” (263)。このように、防災訓練の場面では “children” と “adults” が同一の場にながら明確に分割されており、そして “adults” が “children” を統制しようとする。しかしその統制は首尾よくいかない。防災訓練において、“child(ren)” と “adult(s)” が協力したりすることは一切ない。両者は同一の場にいながら、混ざり合うことも協力し合うこともない。また、“adults” の内部で、あるいは “children” の内部で分裂があるようなこともない。しかし Lyra はそのような様子を客観的に見て、それを利用する。防災訓練の場面ではこのような事態が生じているのである。また、防災訓練の場面では個人や性別が消失し、“child” か “adult” かでしか人の区別がなされない。防災訓練の場面には Annie も Bella も Martha も Sister Clara も Sister Betty も登場しない。³ いや、登場しないというより、彼らはその場にいるはずなのだが、そのことが明示されないのである。彼らは “child(ren)” あるいは “adult(s)” という呼称に吸収され、総体化され、消失している。ただし、防災訓練を抜け出す Lyra と Roger と Billy だけはその総体化から逃れている。

次に、“Bolvangar might have been on the outskirts of London, and children might have been arriving all the time, for all the interest Sister Clara seemed to show.” (238) という文を分析しよう。この文は危機的な問題を含有している。これは、Lyra が Bolvangar に到着し、Sister Clara に連れられて施設内を移動し、或る部屋に着いて Sister Clara がその部屋の扉を開けながら Lyra に名前と年齢を尋ねた後の文だ。この箇所は Lyra の考えを語り手が代弁しているとも考えられるし、また一般的に考えられることを語り手が提示しているとも考えられる。この文及び直前直後の文からはどちらであるのか判然としないのだが、この文を詳細に分析してみると、前者の可能性はなくなることが明らかとなる。いずれにせよ、“children might have been arriving all the time” という箇所から、Lyra が何よりもまず “child” として認識されていることが了解される。しかし、この認識は道理に合わない。なぜならば、第 3 節で詳細に確認するが、Lyra が Bolvangar に到着してすぐ、“the man from Bolvangar” が Lyra に彼女の *dæmon* が変化可能か否か質問する (236) ことから、この場所ではどうやら “child” が重要視されているようであるということは知ることができるが、この時点では Lyra も読者もこの施設がどのようなものであるのかという知識を持ち合わせてはいないからだ。このことは、後に Lyra が Sister Clara や “girls” に自分が今いる場所がどこであるのか尋ねることから明らかだ。したがって、ここでは、この施設が数多くの “children” がやって来る場所であることが不用意に先取りされているのである。⁴ この不用意な先取りという事例から、HDM が “child” を強く意識している作品であることが了解される。

以上、Bolvangar の場面において語り手が行う “child” と “adult” の分割及びそれぞれの総体化を確認してきた。これにより、語り手が “child(ren)” と “adult(s)” の分割に依拠して不必要なまでにそれぞれを総体化し、さらにそれによって “child” と “adult” の対立を生み出していることが明らかとなった。次に、作中人物が行う “child(ren)” と “adult(s)” の分割及びそれぞれ

の総体化について確認しよう。

2. “child(ren)” による総体化

まず、“child(ren)” の側における分割及び総体化について確認しよう。

Bolvangar にいる “children” は、自分達のことを “child(ren)” と考え、そして “child(ren)” という名称のもとにまとまりを作っている。彼らが自分達のことを “child(ren)” と考えていることが明示されている言説は、実はあまりない。というのも、彼らは自分達のことを指すために “we/us” という語をしばしば使用するからだ。とはいえ、上述のような言説が全くないわけではない。例えば、“children” のうちのひとりである Annie あるいは Bella (どちらなのか判然としない) の発言から、そのことが了解される。それは次のようなものだ—— “She [Mrs. Coulter] likes watching the kids, when they take us away, she likes seeing what they do to us” (245)。ここでは、同一の指示対象を指して “kids” 及び “us” という語が併用されている。“kids” という語は “children” とその指示対象が同一だ。したがって、この発言者が自分達のことを “child(ren)” と考えていることが了解される。

次に、先程言及した、“children” が使用する “we/us” に着目しよう。Bolvangar にいる “children” が使用する “we/us” の用法について考察することで、彼らがまとまりを作っていることが理解される。“children” のうちのひとりである Martha が、“She’s [Mrs. Coulter is] the one who trapped us, most of us, anyway” (245) と述べるが、この箇所における “us” は自然な使い方として受け取ることができる。しかし、Annie の発言である “Then they take us away one by one and that’s all we know. No one comes back” (244) や、先に引用した Annie あるいは Bella の発言における “us” の使い方は不自然だ。なぜなら、この発言を行っている人は、これらの発言において述べられていることを経験していない、つまり連れ出されていないからだ。事実、これらの発言者は、“adults” によって連れ出された後で彼らに何をされるのか知らない。したがって、ここでは “us” よりも “kids” や “children” といった語を使用した方が自然だ。このように、彼らには不自然なほどの一体感があることが認められるのである。また、Lyra が “Is there boys here as well?”⁵ と尋ねると、Annie, Bella, Martha の 3 人のうちの誰かが “Yeah. There’s lots of us” (244) と答えることから、彼らがまとまりを作っていることが了解される。“children” や “kids” という語はここでは使用されていないが、他の箇所と考え合わせると、彼らは “child(ren)” という名称のもとにまとまりを作っていることが了解される。また、この返答から、彼らが性別を越えて一体感を持っていることも了解される。

これら “children” の発言において、もうひとつ気付くことがある。上述のように、“children” は “we” という 1 人称複数形で “children” 自身を指し示し、“they” という 3 人称複数形で “adults” を指し示している。このことから “children” にとって “child(ren)” と “adult(s)” は明確に分割された 2 項であることが了解され、また両者が対立している様子を窺い知ることができる。

以上、“child(ren)” の側における “child(ren)” と “adult(s)” の分割及びそれぞれの総体化を確認してきた。語り手と同様に、“child(ren)” も “child(ren)” と “adult(s)” の分割に依拠し、

それぞれを総体化していることが明らかとなった。

3. “adult(s)” による総体化

次に、“adult(s)”の側における分割及び総体化について確認しよう。

先に言及したように、Bolvangar に到着した Lyra に “the man of Bolvangar” が “Does your *dæmon* always take that form?” (236) と尋ねる。そして Lyra の *dæmon* が変化できることを知ると、“I see,’ said the man in a tone of satisfaction” (236)。先にも述べたように、*dæmon* はその変化の可能性によって “child” と “adult” を分割する指標となっている。男の声に “satisfaction” が伴っていたということから、Lyra が “child” であることが重要視されていることが了解される。或る人が “child” であるのかあるいは “adult” であるのかという事実は、HDM 全体でもその人のことを判断するための重要な要素のひとつとなっているが、先にも述べたように、殊に Bolvangar では実験材料として “child” であることが不可欠な要素となっているのである。或る “doctor” の発言において、“patient” という呼称が不意に “child” に置き換わる (272-73) ことから、“child” が実験材料として認識されていることが理解される。

第1節で触れたように、Bolvangar の施設で防災訓練が行われるのだが、それに関して事前に “doctor” のひとりが “children” に次のように言う——“Listen, children,’ he said. ‘Listen carefully. Every so often we have to have a fire drill. [...] When the bell, rings you must stop whatever you’re doing and do what the nearest grownup says. Remember where they take you. [...]” (253)⁶。まず、この発言者が、呼びかける対象を “child” と認識していることは明らかだ。また、“adult(s)” と “child(ren)” が分割され、“adults” が命じる側で “children” が従う側であると考えられていることが了解される。その一方で、この発言における “we” という1人称複数形には “adult(s)” も “child(ren)” も含まれており、その点で興味深い。というのも、先に述べたように、Bolvangar では “child(ren)” の側では “we” と “they” で “children” の側と “adults” の側を分割しているからだ。同様に、“child(ren)” の側だけでなく、後にみるように、或る “doctor” も “we” と “they” で自分達と “children” を分割している。論点を先の “doctor” の発言に戻そう。さらに興味深いことに、“the nearest grownup” にこの “doctor” 自身は含まれていない。というのも、直後に “the nearest grownup” を指して “we” ではなく “they” と言っているからだ。これらの点から、Bolvangar にあって、この “doctor” の発言は特異なものとなっている。

或る “doctor” が Lyra に次のように述べる——“When we take children out, it’s because it’s time for them to move on to another place. They’re growing up” (255)。この発言から、この “doctor” は Bolvangar にいる或る種の人々のことを “child” と認識していることが了解される。また “we” という1人称複数形から、彼が、自分自身を含めた何かしらのまとまりを意識していることが了解される。そしてそれは、“children” を指して “they” と述べていることから、“children” とは異なったまとまりであることが理解される。そのまとまりがどのようなものであるのかは明示されないが、いずれにせよ彼は自らを “children” から切り離している。ところで、上述の、防災訓練の前に “children” に対して発言を行った “doctor” と、この “we” と “they” で

“children”の側と“adults”の側を分割している“doctor”が同一人物である可能性があることを指摘しておきたい。先にも述べたように、Bolvangarの“adults”は個人個人が明確に差異化されずに渾然一体となっており、ほとんど区別がつかないのだ。

LyraがSerafina Pekkalaのdæmonと協力し、檻に閉じ込められていた“children”のdæmon達を解放する。その後、檻に閉じ込めていたdæmon達がないことに気付いた“adults”が、そのdæmon達を逃がしたのは誰か、という話し合いを行う。その話し合いはMrs. Coulterと3人の“men”で行われる。その場面で、Mrs. Coulterが“every adult in the station” (271)が犯人の可能性があると述べる。なぜMrs. Coulterは犯人を“adult”に限定しているのだろうか。その理由が明示されることはないが、いずれにせよMrs. Coulterのこの発言内容から、彼女はBolvangarにいる或る種の人々を、何よりもまず“adult”と認識していることが了解される。このMrs. Coulterの発言に対して3人のうちのひとりが、“Had you considered that it might have been done by a child?” (271)と述べる。このことから、この男が人間に関して「“adult”か“child”か」という二項対立的な思考方法を行っていることが看取される。つまり“adult”でなければ“child”なのである。Mrs. Coulterの発言とこの男の発言を考え合わせると、HDMにおいて“child”と“adult”の分割が徹底されていることが納得される。

上述の場面で、“men”のうちのひとりが、手術を行うことは“adult operators”にとって苦痛である、と述べる(272)。これが、第1節で論述を先送りにした、惨い“adult”像の形成に関する或る“adult”の発言だ。彼は“operators”にわざわざ“adult”という形容詞を付し、手術を施す人の他のあらゆる要素の中から“adult”であるという要素に焦点を合わせ、それを提示している。また、この“man”の発言では、手術を受ける側である、死亡する危険さえある“child”の側の苦痛は全く考慮されていない。このように、この“adult”の発言では“child”と“adult”の分割が行われ、またそれだけでなく惨い“adult”像が生産されているのである。

最後に、Bolvangarにいる“adults”がLyraをどのように認識しているか確認しよう。Bolvangarの施設の天井裏に忍び込んだLyraを発見した“man”の第一声が“A child!” (275)であることから、彼がLyraのことを何よりもまず“child”として認識していることが理解される。また、天井裏に潜んでいたLyraを捕まえた人々がLyraの処遇について話し合う際、その中のひとりがLyraのことを“The new child” (276)と言っており、このことから同様のことが言える。Lyraは、Bolvangarの人々に、偽名ではあるが自分の名前を伝えているので、Bolvangarの“adults”はLyraの“Lizzie Brooks”という名前(偽名)を知っているはずだ。それにもかかわらず、“adults”はLyraのことを“child”と呼ぶのである。この後、或る期間Lyraと共に過ごしたことがあるMrs. Coulterが、Lyraを“Lyra”だと認識していない状態で一瞥した時に、“And who is this child—” (278)と尋ねる。このことから、Mrs. Coulterが見た目においてLyraを“child”と認識していることが看取される。このように、Bolvangarにおいて“adult(s)”にとってLyraは“child”として、さらに言えば実験材料としての“child”としてしか認識されないのである。しかし、当然ながらMrs. CoulterがLyraを“Lyra”として認識した後は、彼女はLyraを“Lyra”として認識するようになる。Mrs. Coulterは“Lyra”のことを“child”と見做してはいても、決して実験材料とは見做さない。この時Mrs. Coulterは“Lyra”という個を見ているのである。

以上，“adult(s)”の側における“child(ren)”と“adult(s)”の分割及びそれぞれの総体化を確認してきた。語り手や“child(ren)”と同様に，“adult(s)”も“child(ren)”と“adult(s)”の分割に依拠し、それぞれを総体化していることが明らかとなった。

おわりに

以上，Bolvangarの場面において，語り手及び作中人物が行う，“child”と“adult”の分割及びそれぞれの総体化を確認してきた。「はじめに」で述べたように，HDMでは“child”と“adult”の分割が明確かつ人間の本質的なものとされている。本論文の分析によって，語り手及び作中人物達は素朴にもこの分割の基準に全面的に依拠していることが明らかとなった。さらに，彼らはその基準に単に依拠するだけでなく，“adult”に区分される人を不必要なまでに“adult”として認識していることも明らかとなった。そのため，物語内容において実際に認められる以上に，物語言説や作中人物が作り出す言説によってさらに“child(ren)”と“adult(s)”の分割や対立が生み出されている。Bolvangarでは，“child”は“child”であるがために価値を持っているので，“child”に区分される人々を“child”と認識することは当然なことであると考えられる。しかし一方，“adult”はそうではない。語り手及び作中人物達は，Bolvangarにいる“child”でない人のことを，“adult”と認識する必要がない時にも，しばしば何よりもまず“adult”と認識する。これは不当な総体化だと言うことができる。そして注目すべきことは，語り手及び作中人物達の“adult”の総体化の方法が一致していることだ。語り手が用いる呼称と作中人物が用いる呼称の一致により，それらが共鳴し，より強固になるのである。

また，本論文の分析から，名前が示された人も“child(ren)”や“adult(s)”という呼称で総体化され，その個性が消失する可能性があることが明らかとなった。「はじめに」で述べたように，何がどのような基準で総体化され，それにどのような名称が与えられているのか，といったことに留意しなければ，その総体に内在する多様な個を看過することになる。そしてHDMはそれを看過している。語り手及び作中人物達は，Bolvangarの場面に登場する人々を，多くの場合において“child(ren)”か“adult(s)”かでしか認識しないのである。

以上のことから，HDMは，“child”と“adult”の分割に関しては自覚的である一方，“child”と“adult”それぞれの総体化に関しては無自覚であると言うことができそうだ。とはいえ，本論文における分析対象はBolvangarの場面のみであった。したがって，今後，HDM全体における“child”と“adult”の分割及びそれぞれの総体化の実態を明らかにしなければならない。また，HDMは何を目的としてこれほど強固に“child”と“adult”を分割しているのか，その点についても考察する必要があるだろう。

「はじめに」で述べたように，児童文学研究において，児童文学が“child”と“adult”の分割を生産し，それぞれを総体化する装置となっていることに関する議論が充分になされてきたとは言いがたい。したがって，今後，HDMだけでなく他の児童文学諸作品における“child”と“adult”の分割及びそれぞれの総体化を確認することで，児童文学が必然的に持たざるを得ない機能を明らかにし，それを提示しなければならない。その暁には，児童文学の新たな地平が開けるかもしれない。本論文はその端緒となるだろう。

注

1. Bolvangar では“adults”に対しても切り離しの手術を行ったことがあるようだが、これに関しては Mrs. Coulter の証言によって窺い知ることができる (283) のみであり、手術が実際に“adults”に対して行われたのか等といったことは判然としない。
2. pp. 238-240. の各頁に1箇所ずつ、及び p. 251. に見られる。また、2度、語り手ではなく作中人物が彼女の名前を呼ぶこともある。その場面は p. 243. 及び p. 251. にある。
3. 本論文で先に言及した Dr. Cooper の名前は防災訓練の後に示される。
4. HDM において他にも不用意な先取りという事例が認められる。第2部の *The Subtle Knife* での、Will という作中人物の“Where are the grownups?” (58) という質問がそれだ。興味深いことに、これも“child(ren)”と“adult(s)”をめぐる言説だ。これに関しても併せて詳述したいが、紙幅の都合上言及するにとどめる。
5. Lyra は目的語が複数の場合でも“there's”という言い方を用いる。例えば、Bolvangar の場面以外では、p. 223. に“‘There's thousands of them [the Svalbard bears], en't there?’”という彼女の発言がある。
6. “bell”の後に読点があるのは原文に従っている。文法上は“rings”の後に付けるのが正しいだろう。

引証文献

- 石井直人「現代児童文学の条件」『研究＝日本の児童文学 4 現代児童文学の可能性』編＝日本児童文学学会、東京：東京書籍、1998年、11-48.
- King, Shelley. “‘Without Lyra we would understand neither the New nor the Old Testament’: Exegesis, Allegory, and Reading *The Golden Compass*.” *His Dark Materials Illuminated: Critical Essays on Philip Pullman's Trilogy*. Ed. Millicent Lenz with Carole Scott. Detroit: Wayne State University Press, 2005. 106-24.
- Pullman, Philip. *The Amber Spyglass*. New York: A Yearling Book, 2000.
- Pullman, Philip. *The Golden Compass*. New York: A Yearling Book, 1995.
- Pullman, Philip. *The Subtle Knife*. New York: A Yearling Book, 1997.